敦煌本類林系類書と日本文学

川口久雄

1

高山寺には仏家の書のみならず、世俗の外典、例えば雑伝・雑家に属するものも蔵せられていたとみえて、その江戸後期に著録せられた蔵書目録と思われる「蠟松書録」によると

荘子	十	抱朴子	八
楊子太玄経	五	古逸詩	四
同 方言	三	搜神記	八
同 法言	六	廬山記	三
烈女傳	八	西京雑記	二
續烈女傳	三	李嶠雑詠	二
代酔篇	廿三		

などがリストアップされている。周知のように高山寺本願野王玉篇残巻などの貴重な古鈔本もある。ここに紹介する無名類書残巻もこうしたなかの一つであろうと思われる。

高山寺本無名類書残巻と私がよぶところの古鈔本は、結葉装中型本一冊、縦二八糎、横一七糎、毎面七行陰界、界高二一・五糎、両面写。梅沢本幼学指南鈔と体式が相似ている、平安末もしくは鎌倉初期を下らない写本かと思われる。残巻、首部缺佚、第十七丁より第二十三丁まで存し、尾部また缺佚。その篇名は、

五〔　〕
六　武藝
七　猛力
八　音声
九　傑楽
十　隠士

とあり、本文の記載形式は「漢書曰、大将軍李廣者、……」という体式で、敦煌本類林や眞福寺本瑚玉集とはちがっており、かつ項目も篇首にかかげることをしない。各説話の改まるごとに、二字の欠字をおくだけで改行もしない。しかしその所収の説話や、出典の書名や、篇次などにおいて、すこぶる類林や瑚玉と似ており、興味ある共通性をもつ。

先ず高山寺本類書残巻の保有説話の内容と出典とをかかげる。

〔首部　闕〕

〔三　勁学〕

1 童過　魏志
2 孔子　荘子
3 温舒　史記
4 匡衡　漢書
5 阮瑀　魏志
6 孔子　文士傳
7 韋賢　漢書
8 李沿　逸士傳

〔四　文才〕

1 桓譚　東(漢)観記
2 班孟　神仙傳
3 管輅　抱朴子
4 楊雄　抱朴子
5 〔琴〕高　列仙傳
6 周不疑　零陵先賢傳
7 王恒　武陵先賢傳

〔五　利口〕

1 蘇秦　戰国策
2 子貢　史記
3 盜跖　荘子
4 蔡范　語林
5 廣集　世説注
6 武藝　漢書
1 李廣
2 養由基　史記・語林
3 羿　淮南子
4 觸樓　述異記・後魏書
5 韓質　〔　〕
6 朱始　尚書
7 樓煩　語林
8 蒼頡　幽求子
9 黄帝　黄帝帰蔵経
10 劉渴　〔　〕

七　猛力

1 典長　幽明録
2 任郯　秦州記
3 烏獲　史記
4 項羽　史記

八　音声

1 伏羲氏　古文帝宗
2 文王　周書
3 師曠　晉書
4 楷叔夜　楚國先賢傳
5 伸尼　琴操
6 魯哀公　孔子三朝記
7 漢武　語林
8 東方朔　東方朔内傳
9 呉國王侯　呉書
10 韓朝子　幽明録
11 周文王　帝王世記
12 斉桓公　帝王世記
13 南郭處士　會稽山記
14 師曠　〔　〕
15 瓠巴　列子
16 鄭師　列子
17 韓娥　列子

〔嘯詔〕

〔吟青黄〕

九　餘楽

1 楚荘王　十州記
2 穆公　秦州記

十　隠士

1 許由　廣州先賢傳

〔尾部　闕〕

右のうち三、四、五は私に推定して部類を立てたのである、あるいは一括して「儒行篇」であったかもしれない。計八篇五四則。

このうち類林と比較して共通するものについて考えてみると、武芸・猛力・音声・餘楽の三篇が重なり合うが、そのうち餘楽には共通項目なく、猛力の三話は題名は共通するが説話内容は異なっており、僅かに武芸の五話と音声の二項のみが共通といえるが、それも直接の関係は殆んどないといっていい、例えば

〔敦煌本類林　番射第卅三〕

廿蝿者古之善射之人。驛風於戸牖、射之貫心。〔中略〕出列子。

〔高山寺本類書　武芸篇〕

述異記曰、後魏書曰、觸樓善射也。驛風於牖前射之、百射百中。

とあって内容に似ているところがあっても、類林は廿蝿とあるに対して、高山寺本では樓樓とあって、標目もちがい、出典も異なっている。次に同じ標目であっても、

婁煩者漢高祖時善射。弦不虚発。〔矢〕々則應弦而倒。

語林曰、樓煩者、漢將軍也。善射也。放矢、〔矢〕々飛千餘里。

の如く、内容・出典を同じくしない。養由基の話も、類林では淮南子より出で、高山寺本は史記と語林より出ている。結局同じとみていいのは羿と李廣の話くらいである。標目もし

くは内容でややかかわりがあるかと思われるものを比較すると、

〔敦煌本類林巻九　蓋射第卅三〕	〔高山寺本類書　六　武芸〕
李廣	李廣　漢書
養由基	養由基　史記・語林
羿　淮南子	羿　淮南子
甘蠅　列子	飼樓　述異記・後魏書
更煩　〔　〕	樓煩　語林

〔敦煌本類林巻九　壯勇第卅三〕	〔高山寺本類書　七　猛力〕
秦武王	秦武王　秦州記
秦武王　出仕書（マヽ）	秦武王　史記
項羽　出仕書　史記	項羽　史記

〔敦煌本類林巻九音声歌儛第卅五〕	〔高山寺本類書　八　音声〕
稽康　高仕傳（マヽ）	稽叔夜　楚國先賢傳
韓娥　〔　〕	韓娥　列子

要するに類林と高山寺本は篇次において類似はあるが、直接の関係はないとみていいようである。高山寺本で注意すべきは出典が明記され、その中には語林などがしばしば引用されることである。また転写の際いささか錯簡や誤脱や重複も認められる。その出典書のなかには今日佚書となっているものがあることは貴重であって、資料として学術的価値のあることは敦煌本にゆずらない。また中国唐代民衆社会に行なわれたであろうところの類林のような通俗の類書が、同じく我が古代より中世の僧団社会にも多少のちがいをもった異本の類書として、瑠玉集とともにこのようなかたちで行なわれたことを推定させるものであって、興味多い新資料である。

2

レニングラード本敦煌無名類書残巻についてはソヴェト科学アカデミー東洋学研究所レニングラード支所のL・I・メンシコフ教授のすぐれた研究がすでに出ているので、私はその貴重な成果を拝借して、そのなかみをあらあら紹介し、他の類書や説話集との比較を概説しておきたい。

レニングラードにある敦煌資料はS・F・オルデンブルグアカデミー会員が一九一四年より一九一五年にわたる第二回トルキスタン探検の際に敦煌千仏洞より発掘蒐集してもち帰ったもので、写本残巻・断片を数えあげると、すべて一万二千点。そのうち写本文献三千点は一九六三年と一九六七年に解説目録[2]がメンシコフ教授の手によって刊行された。本書はその第一巻の文学部 No. 1455 に著録せられる Dx-970 即ち敦煌本番号九七〇号写本である。こえて一九六五年にアジア諸人民研究所簡略通報第六十九号、写本版本研究論文集に同じくメンシコフ教授によって「敦煌本無名類書残巻について」という論文が出て、全文の影印を写真版にして附録して

刊行された。[2]

そのなかみの説話を概括してみる。

(1) 前漢の田真兄弟荊樹の枯るるを見て別離を思ひ留まる事。

(2) 後漢の曹娥父を恋ひ身を江に投げて父の屍を抱いて浮ぶ事。

(3) 晉の荀倫津に沈みし弟の屍を求めて牋を投ぐる事。

(4) 齊の靈輒車軸を支えて晉の大夫趙盾の難を救ひ恩に報いる事。

(5) 晉の魏顆父の妾の死を助けしに依りて、妾の父草を結びて其の難を救ふ事。

(6) 楚の伍子胥難を呉に避くる途に於いて一女に食を乞ひ、後に其の恩に報ゆる事。

(7) 淮陰の韓信漂母に食を恵まれ後に百金を報ゆる事。

(8) 大梁の漂母漢の高祖の危難を救ひ其の恩を報いらるる事。

(9) 後漢の楊寶黄雀の難を救ひて環を贈られて子孫三公となる事。

(10) 呉郡の孫鍾瓜を與へし三人白鶴と化して飛び去り子孫富貴となる事。

(11) 洛陽の楊公行人に漿を飲ましめたるに依りて行人石子を與へて恩に報ゆる事。

(12) 晉の毛寶一の白亀を助けて、戦ひの時白亀に助けらるる事。

首尾ともに闕逸。説話十二則、(1)(2)(3)の説話の次に「報恩、第廿五」という篇目が見え、(4)以下が報恩説話であることが知られる。

我が国中世以来江戸期にかけて民間に行なわれた二十四孝のお伽草子に出てくる田真説話が写本の冒頭に出てくるし、伍子胥の仇討ち説話はわが国軍記ものの世界に引かれるところ、韓信漂母の説話は漢楚軍談の一つとして我が近世の民衆には極めてポピュラーであり、曹娥の孝養説話や毛宝の亀報恩説話は東大寺諷誦文や言泉集以来わが国の唱導文学の上でよく知られた話材であった。

いまその各説話の出典について類林雑説と比較してしらべてみる、

レニングラード本無名類書	類林雑説
(感應篇 第二十四)	(巻七感應篇 第四十一)
(1)田真 □(漢武帝時人)	田真 □(前漢人)
(2)曹娥 典録(後漢時)	曹娥 會稽典録(後漢人)
(3)荀倫 □	荀倫 □
(報恩篇 第二十五)	(巻七報恩篇 第四十二)
(4)靈輒 □	靈輒 □
(5)魏顆 史記	魏顆 □

(6)伍子胥	□（景周王時人）	伍員	史記（周景王時人）
(7)韓信	□（前漢人）		
(8)翟母	□（前漢人）	翟母	陳留風俗記（前漢初人）
(9)楊寶	□（後漢人）	楊寶	□
(10)孫鍾	□	孫鍾	宋臨川王幽明録
(11)楊公	搜神記（後漢人）	楊公	漢書
(12)毛寶	□（晉人）	毛寶	□

レニングラード本と類林雑説と対比してみると、十二則のうち十一則が合しており、かつ「報恩」という篇目も一致することは、両者の関係が偶然のものでないことを示すであろう。さらに推察を進めれば、レニングラード本と、類林雑説の原型本類林、もしくはペリオ本類林とかかわりがあったように思われる。すくなくともレニングラード本は類林系の類書の一つであることはいえそうである。このことは真福寺本瑚玉集との比較によってさらにたしかめられる。真福寺本瑚玉集は報恩篇を欠くが、保有する感応篇を比照すると、レニングラード本の感応説話三則全部が一致する。

レニングラード本無名類書（感應篇　第二十四）	真福寺本瑚玉集（巻十二　感應篇　第四）
(1)田真　漢武帝時人	田真　出前漢書
(2)曹娥　後漢時出典録	曹娥　出後漢書
(3)荀倫	荀倫　出類林

瑚玉集では略頌の標目によれば、田真説話は

病己　朽木更花　　田真　死荆還茂

と対しており、次の二則は、

曹娥　没水獲「公」翁　荀倫　投牋得弟

と対して二話一類の形式として出ている。

また蒙求とも何らかのかかわりを否みえない。即ち（4）と（5）とは蒙求巻上に「鑒輒扶輪　魏顆結草」としてみえ、（7）と（10）とは同巻中に「漂母進食　孫鍾設瓜」とみえ、（9）と（12）とは同巻中に「毛寶白亀　楊寶黄雀」とみえる。

蒙求では岡白駒の箋註補注蒙求校本によれば、（4）の出典は左傳宣公二年、（5）は左傳宣公十五年、（7）は漢書列傳第四、（10）幽明録、（9）は續齊諧記、（12）は晉書列傳五十一がそれぞれ出典としるされている。これら出典書の表記ぶりをみてもレニングラード本と補注蒙求とは直接のかかわりはないとみられる。

次にその本文を、かかわり深いとみられる瑚玉集と類林雑説と比照してみよう。（2）の曹娥説話をあげる。

(A)レニングラード本	(B)瑚玉集	(C)類林雑説
曹娥、會稽上虞人、父呼投江而死。娥乃緣江哭之、七日七夜。哭声不絶。女亦	曹娥、後漢會稽女也。其父没江而死。屍骸不獲。曹娥乃緣江号哭、七日七夜。不	曹娥、會稽上虞人也。父後漢桓帝元嘉二年、投江而死。不獲其屍。女乃沿江

投江而死。經三日其女抱屍而出。家人收葬焉。即為立碑於江上。後漢時、出典録。	絶声音。嫗遂投江覓父。遡由三日、乃抱父屍俱出。皆死水畔。家人因收葬焉。時人為之立碑於江上。碑今見在也。出後漢書。	而哭、七日七夜。其声不絶。亦投江而死。後三日、其女抱父屍俱出。家人乃收葬之。郡人為立碑於江上。後漢人。出會稽典録。

これらは後漢書の本文とも、典録の本文ともちがっているが、そのことは後述するとして（A）と（B）・（C）とがちかい関係にあることは一見して明らかである。さらにいえば（A）は（C）とより一層似ているが、さりとて（B）ともよく似ているので、この三者は同系統のものであることはほとんど疑えない。

次に（3）の荀倫説話をくらべてみる。

(A)	(B)	(C)
荀倫、河内人、晉時為郡守。是時郡治鄴城。倫弟北省貝氏、乘馬没盟津而死。求屍三日、不得。倫乃投牋於河伯。經一宿、其屍抱牋而出。	荀倫、晉時河内人也。為東郡太守。倫弟備、北省貝氏。乘凍蹶虚、因即没命盟津。求屍三日、不得。倫乃修牋投與河伯。遡由一宿、弟屍乃抱牋而出也。出類林。	荀倫、河内人也。晉時為東陽太守。是時郡治甄城。倫弟備、北省貝氏。乘凍蹶虚没命。求屍不得。倫乃修牒河伯。一宿其屍抱牒而出也。

（B）すなわち瑠玉集の原拠とするところは明記する通りに類林である。これと（A）すなわちレニングラード本と比較するときはぴったり合わないし、（C）すなわち類林雑説ともぴったり合わない、（B）は（A'）（C'）とぴったり合うとみていいであろう。結局レニングラード本は類林そのものでないが類林系の類書、あるいは類林系の一異本にちかいとみられるのである。

私は①出典書名を説話のはじめに「……曰、」という形で出さず、「出……」という風に表記し部類する。②篇目を「報恩、第廿五」という風に表記し部類する。③『類林雑説』保有の説話とほとんど一致する。④「瑠玉集」の説話とも一致するものが多い。⑤本文の性質も小異はあっても大異はない。以上の理由によってレニングラード本は、あるいはパリ本類林と同一写本両残巻かとも推察したのであるが、このたびパリに再遊してパリ本を検証したところによれば別の写本であることは動かせない。結局レニングラード本無名類書は類林系の一類書残巻ということになるようである。

もとよりこれも敦煌本にほぼ共通する俗文学系資料であって、文章も応々誤脱するところを免がれないようである。例えば(5)の魏顆が難を救われるところの叙述があいまいで結草の主が単に一老人となっている。しかしこれは妾の老父が、殉死すべかりし娘の生命を助けられたおかえしに戦場で草を

結んでおいたのであって、その報恩のいきさつが、(5)の本文だけでははっきりつかめない。それは(4)の霊輒の説話で、蒙求補註が扶倫の叙述を脱していることとおなじことであって、レニングラード本類書に限らず、説話集には応々この種のしどけなさを完然に拭い去ることはできないようである。

レニングラード本所収説話の我が国文学への影響は前にもふれたところであるが、今昔物語集とのかかわりをみると、

(1) 今昔物語集巻十、震旦三人兄弟賣家見荆枯返直返住語第廿七

(2) 今昔物語集巻九、會稽洲曹娥慕父入江死自亦身投江語第七

(12) 今昔物語集巻十九、亀報山陰中納言恩語第廿九。同巻十九、亀報佰済僧弘済恩語第三十

のごときがある。その他船橋家本孝子伝・陽明文庫本孝子伝・日本霊異記・宝物集等多くの説話集にある説話とかかわりが認められる。

3

敦煌本に名づけようもない無名の類書・説話集の残巻がかなり多数見出せるのであり、そのなかに各種の系統がある。そのなかの一つとして、故事や典故の語彙を大字で標出し、その出典や語義を分注して出すという形式の部類書の系統がある。多くの場合、二字もしくは三字の語彙で、対偶的に配列せられるので、かりにこれを偶対事類系類書と名づけることにする。類林・瑚玉と形式を異にするところ、説話のなかの故事典故にかかわる用語措辞を標出して双注小書してその語義出典を説明するもの、一種の用語語彙事典（Phraseology）である。白居易の白氏六帖や徐堅の初学記の事対形式を襲ったものかと思われる。

これらの資料の一部は旧著「平安朝日本漢文学史の研究上巻」[3]に影片を掲げて、簡単に解説したのであるが、その後に新しい資料をえたので、やや深めて説明しておきたい。先ず(A)ロンドン本 Stein 2588 号写本[4]は首尾欠の巻子本。「送別・客遊・薦挙・報恩」の四篇を保有する。例えば送別篇では次のような語彙を標出する。

西征　東征　河梁　胡越　北梁　南浦
都門　東門　抗手　不拝　贈言　風馬
数行　岐路　離庭　別館　征陌　易水
驪歌

という一九項目。このうち

西征　東征
北梁　南浦

などは明らかに対偶の語である「北梁　南浦」の分注に

楚辞曰、悲莫悲兮生離別。又曰、憭慄兮為在遠行、登山臨水、送将帰。又曰、超北梁兮永辞、送美人兮南浦。

とあり、これは芸文類聚巻廿九、別上のひきうつし、または抄出であって北梁・南浦の出典としては最後の一句だけでも足りるわけである。もとは「別館・征陌」で終ったのであるが、その後に

易水　燕太子丹使荊軻刺秦王、祖送易水之上、高漸離擊筑、宋意和之曰、風蕭々兮易水寒、壯士一去兮不復還。

を濃い墨筆で書き加え、さらにまたそのあとで淡い墨色で、

驪歌　古歌也。送有將去者、輒歌、因歌而言別也。

としるして書き加える。易水と驪歌とは対しない。また都門の注文の末に「挂冠冕於都門而去、言不仕也」というように行外にはみ出して書入れる場合もある。易水の注のごとき説話文学の素材となる記事が多い。

次に (B) Stein 78 (5) についてみる。これも前者と同系のもので、首部欠、「送別・客遊・挙薦・報恩・兄弟・孝養・悪孝・孝行」の八篇を存し、尾部に空白があるからこれで巻末とみられる。前半「報恩」までが S.2588 と重複する。S. 78 では掲出する語彙や順序に小異があり、前者に書入れてあったものが前に入り、そのあとに「岐路　離庭　別館　征陌」と次第されている。注文にも小異の存するものがある。易水の注「祖送軻至易水之上」とあるが如きである。

体裁でも小異があり、篇の見出しも必らずしも改行しないし、篇のすぐ下に本文を書く。次に報恩篇に着目してみると、

扶輪　結草　絶纓　盗馬
葬地　種玉　困鶴　傷蛇
逐虎　釣魚　黄雀　白亀

の十二項目。A本とは「黄雀　白亀」の場所がちがうだけで一致する。明らかに対偶の語彙である。これら十二項の説話の主人公とその出典を類林雑説によって掲出してみると、

ロンドン本 S.78 無名類書	類林雑説　巻七　報恩篇第四十二
(1)扶輪	殷祖
(2)結草	魏顆
(3)絶纓	楚荘王　〔韓子〕
(4)盗馬	秦穆公　〔春秋時人〕
(5)葬地　〔幽明録〕	孫鍾　〔宋臨川王幽明録〕
(6)種玉　〔搜神記〕	楊公　〔漢書〕
(7)困鶴	剡參
(8)傷蛇	隋侯
(9)逐虎	漢武帝
(10)釣魚	楊寶
(11)黄雀	毛寶
(12)白亀	

のごとく、(9)「逐虎」の配尚の説話だけがなく、他の十一則は全部ある。すなわち体式こそ違え、説話そのものにおいては、本書は類林雑説とちかいといえるわけで、つまり本書が

類林系の類書の範疇にあるものとみられないであろうか。次に芸文類聚巻三三、人部一七報恩篇と比較すると、

2　魏顆　　左傳
3　楚荘王　　説苑
4　秦穆公　　呂氏春秋

の三則だけが一致するが、文も異なっており、直接の関係は認められない。

要するに「報恩篇」のみに着目してみれば、前述のレニングラード本無名類書の九則のうち類林雑説の報恩篇と八則が一致し、S. 78 は十二則のうち類林雑説の報恩篇と十一則が一致する。類林雑説は類林の原型をできるだけ伝えようとしたものであるから、結局レニングラード本も、S. 78 も報恩篇に関するかぎり類林の抄出本もしくは改編本であるとみられる。

次に (C) Stein 79 (6) についてみる。首部闕佚の巻子残巻。その篇目をみると『「喪葬」・婚姻・重妻・棄妻・棄夫・美男・美女・貞男・貞女・醜男・醜女（尾部欠）』の十一則で、首尾の二則は一部欠である。首部は

蔬里　泉臺　夜臺　□
蔬露　朝露　宴□
口乞　電穹　□

の八項目が残っているが、蔬露・蔬里は搜神記にいうごとく挽歌詞の二章の名であり、この篇は喪葬挽歌に属するものと推定される。次に婚姻篇は伐柯以下二九項。尾部の承桃・冰清・璧潤・絲蘿・同穴・移天の六項は墨色を異にし、後の書き加えのようにみえる。次の重妻篇は畫眉以下四項。棄妻篇は蕩舟以下五項。棄夫篇は買臣妻・覆水の二項。美男篇は潘安仁以下六項。注意すべきはここでは「潘安仁　韓壽……」の如く人名掲出の形式をとることである。次に美女部は西施以下二七項ある。

1 西施　2 南威　3 碧玉　4 緑珠　5 絳樹　6 青衣
7 燕姫　8 趙女　9 末嬉　10 妲妃　11 飛燕　12 陰皇后
13 黄公女　14 梁冀妻　15 娥眉　16 顰蹙　17 鳳釵　18 瓊姿
19 綺態　20 千金笑　21 雙玉啼　22 色似芙蓉　23 花如桃李
24 李夫人　25 夏姫　26 鄭袖　27 褒姒

このうち□にかこんだ五項は後の書き入れであるし、6—9の紙背に、

細腰　楚靈王好細腰、宮中多餓死。

の一則の紙背書入れがある。1・2、3・4、5・6、7・8はそれぞれ簡単な注であり、それぞれ対偶を構成している。S. 79 が

西施—南威　絳樹—青衣

となっているのを初学記の事対とを対比すれば

南威—西子　絳樹—青琴

となっていて、小異があるが、だいたい一致する。また7・8の「燕姫—趙女」は漢武故事に「燕趙美女二千人」とあり、特に説話というほどのことはない。

右のうち1・4・7・8・12・13・14・24の八項は芸文類聚巻十八、美婦人に出ているのに対して、1・9・10・11・12・13・14・24・25・27の十項は類林に出ていて、順序も一致することが多い。芸文類聚に比して類林の方がよりあいちかいようである。15—23は要語であって人名でない。この美女篇だけの構成についてみると、

Aブロック　1—8　人名を標出、対偶をなす。
Bブロック　9—14　人名を標出、類林より取るか。
Cブロック　15—23　語彙・詩語を標出、対偶をなす。
Dブロック　24—27　後人の増補。

のように類別できるようであり、成立の順序をつげるものではなかろうか。11の飛燕の注を他の類書におけるそれと比較してみよう。

ロンドン本S.79	類林	瑠玉集
飛燕、漢平陽公主家婢、漢成帝寵之。納為趙皇后、（身輕舞於掌上）	趙皇后者、本平陽公主家侍者、字飛燕。公主来朝、飛燕侍従入内。飛燕為人纖軟有美色。前漢成帝幸之。以其躰輕得寵、遂拝為皇后。前漢書。	飛燕、姓趙。前漢平陽公主家侍者。字飛燕。纖軟美麗。又善歌舞。漢成帝見而悅之。乃進入宮。後偏得幸。遂立為皇后。出前漢書。

すなわちC本は類林などに拠りながら、さらに略記し、同時に別の飛燕外傳あたりの伝承説話の要をとって追記している。要するに簡便俗用のための類書の性格といえよう。

本書が類林系統をうけていることは、例えば貞男篇に、

顔叔子（魯人也。閉居一室、夜大雨。北舍屋崩。有女子来投宿。（顔叔閉戸坐）叔曰。欲民捨火至焼。明己不二。周時人。出史記。）

の如き「周時人出史記」などの記載形式にみることができる。

貞男篇は顔叔子以下四項。貞女篇は秋胡婦以下七項、そのうち終りの楚貞姫・礼修・陶公女の三項は後の書き加えである。醜男篇は張孟陽以下三項。醜女篇は嫫母・無塩・鍾離・宿瘤・荆釵・蓬頭・阮□の七項で以下は佚している。醜男に見える張孟陽・左太冲の二項は瑠玉に略類として

孟陽頬遭煽瓦　左思容鹿被唾

とみえ、醜女の嫫母・無塩も同じく瑠玉に

嫫母鍾頭顯賜　無塩戻股垂胸

とみえている。

以上(A)(B)(C)の三種の敦煌無名類書をみるとS.79とS.2588とは体例が全く一致するから、同一の本を写した両残巻で、

筆者を異にするだけと思われ、S. 2588 と S. 78 とは同じ箇所をダブって写した残両巻であるといえよう。なお(D)本として Pelliot. 4636 号写本も同系統のもので、孝養・喪孝・孝行・孝感・孝婦の五篇を保有する。本書のフィルムも入手しえたが別の機会に紹介することにしたい。

4

さて王重民の「敦煌古籍叙録」巻三、子部上に「古類書三種」として紹介されるもののうち、第一種 Pelliot 2524 は「存四百餘行、為部卅有九、始王、訖神仙」とある文字はすこぶる関心をそそられるものであったが、漸くフィルムを入手しえて調査したところ、これは(A)(B)(C)(D)の四本の残巻を全部含むところの同一類書であることがわかったので、これを今(E)本として紹介する。(?)先ずその形態は墨付十七丁両面写。原写本を直接見ないのであるが、フィルムによれば敦煌本特有の厚手の料紙で冊子本の綴じ目を失なった散冊らしい。四周を鋭く截断してある。この形はレニングラード敦煌本に応々みかけるものである。墨界十二ないし十三行。篇目を標出し、改行して大字で語彙を掲げ、出典もしくは語義を双注小書することは(A)(B)(C)本と同じい。〔口絵図版参照〕

次にその内容を表示し、かつ(A)(B)(C)(D)本の保有篇目と対比しておく。

(E) p. 2524					(A) S.2588	(B) S. 78	(C) S. 79	(D) p.4636
〔篇目〕	〔項目の始めと終り。〕	〔項目数〕	〔行数〕	〔丁面〕				
(1)王	帝子—楚元王	三三	一一	一	[redacted]	[redacted]		
(2)公主	仙娥—桂戸	二一	四	一—二				
(3)公卿	三槐—麟閣	二三	七	二				
(4)御史	繡衣—驄馬	一〇	四	三				
(5)刺史	部符—熊軾	二六	一四	三—四				
(6)縣令	銅章—三善	二〇	一一	四—五				
(7)朋友	二難—窮交	四〇	二九	五—八				
(8)人才	山上—天竹	四八	二三	八—一〇				
(9)文筆	蓬山—筆海	二四	一二	一〇—一二				
(10)〔辯説〕	碧鷄—智囊	二一	一一	一二—一三				
(11)勤学	下帷—燮樵	一七	一二	一三—一三				
(12)宴楽	東閣—千鍾	一六	九	一三—一四				
(13)富貴	二相—步鄣	二三	九	一四				
(14)酒	九醞—玉膏酒	一三	五	一四—一五				
(15)高尚	三徑—掛三公	三二	一九	一五—一六				
(16)貧賤	棲衡—當爐	二〇	一五	一七—一八				
(17)送別	西征—驪歌	一九	一三	一八—一九				
(18)客遊	雁書—胡馬	一八	一〇	一九—二〇				
(19)薦挙	側席—淳于髡	四	六	二〇				
(20)報恩	扶輪—釣魚	一二	一八	二一—二				
(21)兄弟	同繖—李方	二八	一五	二二—二三				

(22)父母	承顔—梁山	六	二	二三—二四
(23)孝養	扇枕—曽閔	六	三	二四
(24)愍孝	覲天—五情百身	八	二	二四
(25)孝行	負米—范宣	六	四	二四—二五
(26)孝感	瑞禽—黄雀	一一	一〇	二五—二六
(27)孝婦	姜詩妻—孝婦	五	五	二六
(28)葬	蕭望—寵歩	一一	三	二六
(29)婚姻	代柯—移夫	三〇	一三	二七—二八
(30)重妻	畫眉—賦詩	四	三	二八
(31)棄妻	泛舟—採蕪	五	四	二八
(32)棄夫	買臣妻—覆水	二	五	二八—二九
(33)美男	潘安仁—弥子瑕(?)	六	四	二九
(34)美女	西施—褒似	二五	九	二九—三〇
(35)貞男	顔叔子—宋弘	四	四	三〇—三一
(36)貞婦	魯秋胡妻—陶公女	六	七	三一
(37)醜男	張孟陽—左太沖	三	二	三一—三二
(38)醜女	嫫母—阮氏	七	七	三二
(39)閨情	南國—涙竹	二〇	一二	三二—三三
(40)神仙	蓬萊—金案	三四	一一	三三—三四

[redacted]

[redacted]

[redacted]

全部四〇篇、うち(10)は篇目を誤脱するので私に名づけておく。最後に一行空白をおくところをみるとあるいはこれで一応完結しているのかもわからない。完本かとみられるところはたいへん貴重であるが、惜しむらくは筆写がすこしぞんざいで、誤字がいたるところに満ちている。王氏は一字を二字に写し違えている、例えば金璽を金爾玉とするたぐいだと指摘するが、誤脱は数えあげられない。前掲(A)(B)(C)本と対校し、あるいは他の類書とつきあわせるとだいたい校正することは不可能でない。

部類意識を点検してみると、芸文類聚でみると帝王・儲宮・職官・人・雑文・楽・食物・治政・礼・霊異部のもの、ことに人部所収の項目にいちじるしく傾いている。しかし部目においては白氏六帖の朋友・富・貴・酒・貧・賤・孝悌・報徳・謝恩・兄弟・孝行・孝感・婚姻・美丈夫・美婦人・醜丈夫・醜婦人など一致もしくは相ちかいものが多くみられるから、その内容の語彙とともに白氏六帖の影響が大きいことが考えられる。初学記についてもほぼ白氏六帖と同じことがいえる。類林の全容がわかれば、類似部目の状態もよくわかると思うが、今は類林雑説によるよりほかない。友人・辯捷・勤学・豪富・嗜酒・貧窶・報恩・孝行・孝感・死葬・婚姻・美丈夫・美婦人・醜丈夫・醜婦人・烈女・神仙などの部目が一致するから、そのもとの類林とは相ちかいと考えていいようである。

いま(20)報恩篇所収の説話十二則について、レニングラード本無名類書・類林雑説の類林系類書と、芸文類聚・白氏六帖、および本書以後の編纂たる宋の李昉らの撰した太平御覧並びに宋の祝穆の編した事文類聚のそれぞれ報恩篇の所収説話

との出入りを比較してみる。

パリ本 P.2524. ロンドン本 S.79. 報恩篇第二十	レニングラード本 Dx-97. 報恩篇第二十五.	類林雜説 巻七 報恩篇第四十二	白氏六帖 報徳第四	芸文類聚 巻三十三 人部十七、報恩	太平御覽 巻四七九 人事部一二〇、報恩	事文類聚別集 巻三十一 人事部 報恩
(1)扶輪（靈輒）	(4)靈輒	靈輒	餓人		靈輒餓人（左傳）	餓人報徳
(2)結草（魏顆）	(5)魏顆（史記）	魏顆	鬼結草	魏顆（左傳）	魏顆結草（左傳）	死而結草
(3)黄雀（楊寶）	(9)楊寶	楊寶	雀持環		楊寶黄雀（続斉諧記）	（蛇珠）雀環
(4)毛亀（毛寶）	(12)毛寶	毛寶			毛寶白亀（続搜神記）	
(5)絶纓（楚荘王）			絶纓之臣	楚荘王（説苑）	楚荘王絶纓（劉向説苑）	絶纓報徳
(6)盗馬（秦穆公）			食馬	秦穆公（呂氏春秋）	秦穆公食肉（呂氏春秋）	盗馬報恩
(7)葬地（孫鍾）	(10)孫鍾	孫鍾（幽明録）			羊公種玉（搜神記）	
(8)種玉（陽公）	(11)楊公（搜神記）	楊公（漢書）			嗜參白鶴（搜神記）	
(9)困鶴（嗜參）					隋侯大蛇（荆州記）	
(10)傷蛇（隋侯）		隋侯	蛇銜珠			蛇珠（雀環）
(11)逐虎（區尚）						
(12)鈎魚（漢武帝）					漢武白魚（三秦記）	魚報雙珠

この比較によっても本類書は類林系類書であり、白氏六帖などの要語主義の要素をとりいれてなったものとみられる。太平御覽は、これらの比照の結果本書のごとき民間俚俗の類書の説話をも網羅し精校をとげたものであることがわかって興味深い。結局以上の比較の結果どこにも見えない説話の一則を本書が保有していることがわかる。(11)の區尚の逐虎説話である。次に引いておく。

逐虎　區尚去孝。居喪（間）。郡人逐虎。々急（来）投尚廬中。尚以衣下政之云無。虎遂得免。尚故云（去）其夕翁亟居尚廬中。（8）

次に P. 2524・S. 79 の美男部 (1) 潘安仁、(2) 韓壽、(3) 衛

玠、(4)何晏、(5)董賢、(6)弥子遐を、初学記の巻十九、人部下、美丈夫第一と比較すると(1)夏潘連璧、(3)甥舅映珠、(4)何晏絶美・何晏若神仙、(5)董候資珠の四則が一致し、敦煌本類林巻九、美人第三十六と比較すると、(1)(2)(3)(4)の四則が一致する。白氏六帖、美丈夫と比較すると(1)擲果連璧、(3)羊車の二項だけが共通である。

次に美女部について前述のようにS.79の27項目を類林と比較するとABCDの四ブロックになり、Aブロックでは(1)西施のほか一致するものがないのに反して、Bブロックでは(9)—(14)ことごとく類林と一致し、順序までもほぼ似ている。この事実こそ本書が類林の系統を引くものであることを確実に立証するものである。次にCブロックの李夫人・夏姫・褒姒の三項が類林と一致する。また27項目のうち初学記と共通するものは1 2 5 6 14 15の六項にすぎない。Cブロックを白氏六帖の美婦人に比較すると20千金之笑、22灼々芙蓉の二つだけが共通する。これを要するにP.2524 S.79の類書は美男・美女部において類林系であって初学記・白氏六帖の系統でないことが明らかになるのである。

要約すれば以上述べてきたP.2524以下一連の無名類書群は、同一のものであり、それは初学記の事対の体式をもっているが、初学記や白氏六帖の系統に立つものでなく、敦煌本類林の系統に立つものである。類林がさらに通俗簡便に改編され、人名を掲げる説話主義より、典故・要語を掲げる語彙主義へと過渡の姿を示す珍しい資料といえよう。郷校俚説が、民衆俗用のために誦読して教えたり、民間の人々が簡略な座右の書として愛用したところの兎園冊府的性格にちかい類書と考えられる。写しも誤字や脱字が少くなく、あらっぽいものであるが、そのなかには前述逐虎説話にみるように珍しい説話を保有し、かつ羅振玉がいうように、[9]古佚書を豊富に引いている点で、貴重な資料といわなければならない。

5

本書が日本文学とかかわりが広く深いことは小著の影片解題でいささか言及したところである。試みにいうならば、報恩篇において楊宝の黄雀・毛宝の白亀以下の動物報恩譚はわが国の説話文学に深く影響しており、漢武帝が助けた魚が明月の珠を銜んで帝に献じ、隋侯が助けた蛇が夜光の珠を含んで侯に報じた話などは本朝文粋の詩序に出、十訓抄に見える。毛宝の亀の報恩説話は我が国ぶりに焼き直されて、今昔(巻十九)や宝物集(第五)の山陰中納言の亀報恩の話として語りつがれ、源平盛衰記(巻二十六)にもとり入れられる。浦島の物語もあるいはこれの遠いこだまかもしれない。楚の荘王が群臣の夜会に纓を絶たせた話は唐物語の素材の一であり、あるいは絵に描かれエトキされたかもわからない。美男・美女篇についてみても潘安仁の車に町の女たちが菓物

をなげこんだ話や、石崇の愛人の緑珠が東楼より身を投げた話、李夫人の反魂香の話などは唐物語の説話、漢故事和歌、蒙求和歌などで、我が国文学の上にいろこく投影する。西施の話、妲己の話、褒姒の話は曽我物語の中にくみいれられて語られたらしい。また李夫人の話は言泉集（二帖之二）などの唱導文学の中にも出てくる。西施や燕姫や梁冀妻や飛燕のような美女説話は本朝文粋や和漢朗詠などにおいてなじみのもので、娥眉や蟬鬢の語は三教指帰・菅家文草・勅撰漢詩集のなかでしばしばつかわれる。今昔物語集のなかで毛寶説話が変容して出てくるように、源氏物語の紅葉賀巻の中に、船楽を奏して舞う源氏と藤壺女御とのやりとりには飛燕と馮無方の情事がそしらぬかおつきでとりいれられている。美男の韓壽が出入に異香があったという話は、源氏物語の光源氏や薫や匂を連想させなくもない。これらを投影する日本の古典は平安や中世だけでなく、近世の俳諧の世界にもうけつがれてはばひろく影響している。

本稿は拙論「敦煌本類林と我が国の文学」（「日本中国学会報第二十二集」一九七〇年十月刊）の続篇として執筆したもので、理解の便宜上その内容項目を引いておく。

1　中国における通俗私撰の類書と我が国文学への影響
2　敦煌本類林 P. 2635 の出現
3　類林の編者と成立・我が国への伝来
4　真福寺本瑠玉集と敦煌本類林との比較
5　敦煌本瑠玉略出本 S. 2072 と類林との比照
6　類林雑説と類林系類書との比照
7　三教指帰覚明注所引瑠玉集佚文と類林系類書
8　敦煌本類林と瑠玉集等との保有説話・引用佚書
9　類林系類書諸本の系統

（附記）レニングラード東洋学研究所所蔵カラホト出土コズロフ発見資料の中にある西夏語訳「類林」の出現について。

本稿は右に引き続くもので、次の五項からなる。

1　高山寺所蔵類書残巻と敦煌本類林との比較
2　レニングラード本敦煌無名類書残巻 Dx-970 と敦煌本類林との比較
3　ロンドン本敦煌偶対事類系無名類書残巻 S. 2588, S. 78, S. 79 等について
4　パリ本敦煌偶対事類系無名類書 P.2524 の内容とその性格
5　パリ本 P.2524 号無名類書と日本文学とのかかわり

（以　上）

(1) Л. Н. Меньшикова, 'Описание Китайских Рукописей Дуньхуанского Фонда Института Народов Азии, выпуск I' Москва 1963. Литература. p. 573.

(2) Л. Н. Меньшикова, 'Фрагмент неизвестной Лэйшу из Дуньхуана' (Краткие сообщения Института народов Азии, 69. Исследование рукописей и Ксилографов. Института Народов Азии. Москва, 1965.) pp. 77—98.. Приложение pp. 205—206.

(3) 拙稿「和名類聚抄の成立と唐代通俗類書・字書の編纂意識」(『平安朝日本漢文学史の研究、上巻』第十四章、第二節、昭和三十四年三月) 三九〇—三九一頁。

(4) Stein 2588. 紙高は二七・五糎、界高は二三・一糎。長さは二・七五呎。

(5) Stein 78. 紙高二九・七糎、字高二七・一糎。長さ四呎、厚手の唐紙、無界。紙背は書儀残巻。

(6) Stein 79. 紙高は二七・一糎、界高二三・七糎。長さ四・七五呎。

(7) 羅振玉は一九一七年に「雪堂校刊群書叙録」巻下の四八—四九頁に唐写本古類書三種のうち、第一種としてこのパリ本 Pelliot 2524 について解説し、ついで「鳴沙石室古籍叢残続」としてこれらの類書を影印した。王重民の「敦煌古籍叙録」の古類書の項はこの跋文を引用したものである。右の影印本は一九七〇年四月文華出版公司から「羅雪堂先生全集三編第八冊」に収められて複製刊行された。

(8) 猛獣救恩報恩のパターンの説話である。ほかに敦煌文の話が洲鑑類函の物報部に出ている。

(9) 「惟所徴引逸書甚多。若東観漢紀・魏略・斉職儀・異苑・先賢傳・竹林七賢傳・招賢記・幽明録・三輔録・已東記・會稽典録・魏子・譙子諸書、並為采輯古佚籍者之渾寶也」(『鳴沙石室古籍叢残 続』唐写本類書、羅振玉跋)

賢臣妻

原朱買臣會稽人也家貧好讀書不事產業妻朱氏去居四年四十當貴今已卅九御不待之妻曰公如之奇終餓死有何妄乎妻遂去之買臣明年上書帝賞之拜為侍中帝謂買臣妻曰富貴不還故鄉如衣錦夜行又定會稽太守妻與後夫治道買臣之郡見謂之命夫妻飲後國國郡舍中供不食數日妻慙而自死

覆水

漢書不仕產業將行窮妻於他舍妻曰君必是停卿卿為郡公卿物我不能乎居為妻遂去之月後為丞王師武王伐紂以月為軍師封為齊侯公車歸至齊路傍有婦人大哭公令別之答曰妾聞前夫為齊侯其梅也公曰我是也婦甚悔公令取一杯水來至令西流於地又令收之婦曰水入地如何可收公曰是我之重寧宜言

美人男

潘安仁

潘安岳字安人與夏侯湛為交之產美相隨洛中有逮壁又安仁來車入市洛陽婦見之競以瓜果擲之滿車

韓壽

潘此人安壽美貌曾詣賈充舍作客充令婢送膳之

衛玠

字平原魏明帝擬以侍郎湯餅有宿疾廢而死

何晏

字平叔魏明帝擬以侍郎湯餅食之汗流以巾拭之面轉狀如

董賢

美貌漢哀帝寵之為黃門郎常帝卧賢以身當帝衣帝起賢不敢動帝大悅遂以賢為大司馬

弥子遐

衛靈公寵臣也公嘗與之遊桃食之半而遺公之

美女

西施

越之美女

南威

晉侯得南方美女

碧玉

劉碧玉小家女

綠珠

石崇家妓美貌

綠樹

美人名也

敦煌本無名類書 Pelliot chinois Touen-houang 2524 〔美男・美女部〕

パリ国民図書館